

## 離魂の可能

孫佩霞

―『源氏物語』の「物の怪」をめぐる―

『源氏物語』が文学的意義において最も成功した理由は、その超時代の可読性にあると言えよう。つまり、古今東西に共通する人間一般の「心」を見事に表現したところである。これはその時代の社会観念や知的水準に由来する作中人物の「心」とは別次元のもので、はつきりと区別して論すべきかと思われるが、作中の人物たちの「心」についての研究を見ると、どうも研究者の社会意識や知的認識と作中の人物たちの思惟意識とは混同されて一体になったような感じがしてならない。この現象は『源氏物語』の「物の怪」についての論述にはとくに目立って見える。作中人物の、「幽界」から踊り出す「魂」（所謂物の怪など）についての論議が、私たち現代人の心理分析になったように見える。なるほど、『源氏物語』自体は虚構の文学世界であり、この「遊離靈魂」という構想は今日の一般常識からいうと、現実にはあり得ないものだと思う。れるに違いないけれど、だからといって、作者も、まるで私たち現代人と同じような態度、認識で作中の「幽界」からの「魂」を作り出したというような考え方は妥当であろうか。千年前の社会の文化文明の実状、作者と作品がこのような環境のなかで生まれたことなどを、古典文学研究において、大前提として重視せねばならないことと思うが、「物の怪」に関する論説を見ると、どうも、このことが忘れられているような気がする。以下はこの小論を通じて作品の「遊離靈魂」構想の性質について、その時代の社会環境と文学環境の両方から考察してみたい。

### （一）遊離魂の様々

紫式部の構想した「遊離靈魂」たちをどのように理解すべきか。この

問題を検討する前に、まず、遊離靈魂の定義範囲を明確にさせるために『源氏物語』に登場したこれらは、どのように表現されているかという実態を調べる必要がある。語彙にはつきりと表現されたもので、「生き霊、霊、物、物の怪、魂、」や、「物」などもあれば、その姿、形、或は言動が人の夢などに現れるものもある。ここでは、このように、その人間の肉体を離れた「魂」が、現実世界の中の作中人物になんらかの働きをかけるという共通性質によって、固有人格を持っているものと持っていないものを概して「遊離靈魂」と名付けたい。これによって調べてみると、遊離靈魂になったことのある人物は、桐壺帝、藤壺、六条御息所、柏木、常陸の宮、宇治の八の宮などから、正体不明の女の霊や昔の法師などまで、人間社会の最頂点にいる高貴な人物も、底辺の卑しい者も含めた様々な身分の人達であることが分かる。このように作品全構造を貫く、複数の、色々な立場の人物が「遊離靈魂」になった、という設定には、創作技法を越えた主題意向が秘めていると、考えられよう。

ところが、この創作事実の意義を全構造から検討するのが少なく、中から最も目立つ六条御息所の「霊」だけを取り上げて、個別的に見るのが多い。ではこれについて論説を、次の最も代表的な二つの意見を挙げておきたい。これは藤本勝義氏の著作『源氏物語の「物の怪」』（1）によるものである。一つは清水好子氏の「自己暗示説」で、一つは秋山虔氏の「現実感重視説」である。お二方の、主に六条御息所の「生霊」事件についての論説は、藤本氏の右の文章を借りると、

葵巻で、芥子の香り（物の怪退散を祈って焼いた匂い）がどうしても取れないとする御息所を、清水氏は、そのような自己暗示にかかっているのだと合理的に考える（中略）、清水氏のお考えの根底に

は、パノニアの妄想であり、錯覚であるとする精神分析的見地や、医学的見地からの発想がある。(中略)一方秋山氏は、御息所のそのような状態を、実際にはありえないだろうが、必然的な経緯として仕立てた、その現実感そのものを重視する。

といったものである。近年、橋本真理子氏や桑原博史氏などによって、清水氏の説に相通じる、更に詳しい分析がなされたことも、藤本氏によって紹介されている。それに対して藤本氏が、前掲の著作で、「遊離魂」の関わっている各人物をそれぞれ主体として憑霊との因果関係を分析し、所謂「物語のコードの読み換え」という視点から

源氏、御息所、葵上それぞれに「心の鬼」意識を内在させている心的状況が見えてくるのである。生霊を、それぞれの「心の鬼」の見える幻影とする、いわば報酬された語り手の意識が、その巧妙ともいえる描写の積み重ねから、覗き見られるのである。

と述べられている。これは上記の二説と違うように見えるが、しかし、ご本人が

作者には、物の怪を「心の鬼」とする意識はあったにしても、なぜ、そのことを少しでも分かるように書かなかったのか。(中略)この場合は、先に触れた秋山氏の考えのように、物の怪跳梁の様はきわめてリアルである。生き霊が葵上を取り殺したという能動性が刻まれているのである。良心の呵責の見える幻影などなどという葉で片づけるには、かなり複雑でもある。

と指摘されながら、

憑霊現象はなによりも、追いつめられ限界を越え、破綻を来した精神状況の、そのバランスの崩壊に深く関わって、象徴的に表現されたものと考えられるのである。実はこのことは、生き霊に限らず、

を感じ取ったという分析になっているのではないか。これは物語の文脈事実を無視することになるし、「遊離魂」の総体的構想の同質性を看過することにもなる。結局、構造関連性だけの分析に偏って作品の最終テーマとの関係という問題が、論述している間に忘れられてしまうことになる。いったい、文学創作活動においては、構造が作品テーマの為に考案されるものであって逆の関係ではないのである。

なるほど六条御息所の遊離魂は「幻想」だと、「疑心暗鬼」だといって、紫式部がこの認識を持っていた恰好の例として必ず挙げられる唯一の論拠は、紫式部のある和歌である。歌は周知のものであるが、分析のために引用する。(2a)

絵に、物の怪のつきたる女のみにくきかたかきたる後に、鬼になりたるもの妻を、小法師のしぼりたるかたかきて、男は経読みて物の怪せめたるところを見て

亡き人にかごとをかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ

返し、

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ

この歌は

物の怪に取り憑かれた後妻の後に、物の怪となって取り憑いた亡き前妻が描かれ、夫が経を読んで物の怪を調伏しようとしている、という絵に対して、紫式部は「亡き人は」の歌を詠む。夫がかような憑霊を見るのは、「おのが心の鬼」すなわち「良心の呵責」のせい、あるいはその人の「疑心暗鬼」が生み出す現象とする。

という藤本氏の解釈が一般的に公認されているようである。この歌を根拠に、藤本氏自身も、物の怪が「心の鬼のみせる幻想」というのは、紫式部の考えとして、作品の御息所の夢などを「おそらく作者は、妄想で

御息所の死霊などの憑依により、後章で述べるが、病臥、出家、あるいは死去したりする女君たちの場合にも、同類のことが言えるのである。

と論じられて、結局「女性たちの苦悩と、その社会に巣くう闇の象徴である怨霊とを結合させ」た文学行為と言う結論を下されたのである。この結論は根源的には、清水氏の医学的精神分析の範疇を出ていなかったと言えよう。ところが、ここで一つの問題に直面せざるを得ない。前掲したように、「遊離魂」になったのは天皇、親王、皇后、妃もあれば皇族にゆかりの深い人もある。最後に、無名の者まで登場してくる。それらは、どれでも主人公たちの人生を方向づけたり、予告したりして、物語全体に互って霊達の威力を見せている。こういう複数の異なる身分の人の霊魂遊離構図と、その暗躍による物語の展開機軸——作中人物の生と死の設定は、作品においては象徴ではなく、夕顔、葵上の死、紫上の病氣、浮舟の入水などは、まぎれもなく結果そのものである。これらの構想からは作者の主題意向が読み取れるのではないだろうか。六条御息所が、これらの「遊離魂」の中の「悪霊」に書かれているように見えるほど極端的例に過ぎない。「悪霊」だろうと、「守護霊」だろうと、何れも、「この世」に何らかの「執着」を残して成仏できない、人々の生きる「現場」に現れて、その現実の人生を干渉する、実在している「遊離魂」であるという本質においては変わりはない。その実在性によってこそ人物の悲劇性が成立でき、物語を展開させ、そして読者がそれによって感動させられたことは否めないであろう。「遊離魂」の中の六条御息所の霊を、作中人物の「自己暗示」とか「疑心暗鬼」とかで解釈するのは、結局、私たち現代人の心理道徳と知性を、作中人物の思惟方式と看做し、光源氏などの心が現代的な意識水準にしたがって物事

あると知悉しつつ、かようにリアルに描いているのである」とされている。さらに、弘徽殿太后が、物の怪に取り憑かれても、また朱雀帝の見た桐重院の夢を伝えられても、それを幻想とする態度は、「いわば、作者の屈折した、報酬された主張であった」と述べられているのである。

それでは、式部の歌を調書きからもう一度検討してみよう。式部の「おのが心の鬼……」という下半句が、調書きの「男は経読みて物の怪せめたるところ」に触発されたことは明らかであり、「亡き人にかごとをかけ」ることへの怒りである。「せめたる」は古語辞書(3)によると「責む」で、過失や罪などをとがめるという意味で、「かごと」は言い訳、口実、他にかこつけて恨み嘆く言葉といった意味である。式部の歌の旨は、物の怪になって祟っている前妻ばかりを責め、自分は被害者という顔をしている男に「おのが心」を一喝したところにあるのが自明なことである。ここの「鬼」というのは、その妻が「物の怪に」苦しめられている事実を否定するものではなく、むしろこの惨状をもたらした「鬼」は男の内心に記憶された昔の過去の罪によるものであり、それが「亡き人」に責任を負わしたり責めたりするより、自分の罪を懺悔しろという次元のものではなからうか。この成仏できない「幽霊」は六条のそれと恰好の照応となっている。「心の鬼」という言葉の先端が表面意味を超えた奥まった処——清算されない「因縁」をつきとめたものである。「鬼になりたるもの妻を、小法師のしぼりたるかたかきて」というのも、「物の怪」が絵の中の人たちの目の前で祟っている現場記録と言えよう。このような憑霊現象はその時代には普遍的に信じられ恐れられたもので、こういう読者側の時代観念まで、式部が否定しようというような見方には納得し難い。さらに日記にはより多く書かれた、実生活中の祈禱など記事の筆致からも、式部は現実の中の憑霊現象を事実とし

て見ていたことが推論できる。まして成仏できない魂が「中有」にさまよっているというのは、仏教の理論なので、信心深い式部には、それを信じないとは考えられない。又、『源氏物語』を自律的な文学世界として見ても、濃縮された人物が、皆「疑心暗鬼」、「良心の呵責」という心理状態にいるというような必然的文脈はない。鴨山茂雄氏が「物語の人物を近代市民社会の産物である「個人」の概念をもって論ずることの無意味なこと」を大変興味深く思うと述べられた(2b)ところに、実に同感を覚える。

例えば、六条御息所の生霊事件に関わる中心人物光源氏の場合でも、熊谷義隆氏の指摘の如く理解するほうが適切であろう。ちょっと長くなるが、引用させていただく。(2a)

しかしながら、光源氏にはそのような「心の鬼」は見いだせない。確かに彼は御息所を「いとほし」と思い続けてはいるが、それはこの時期まだ良心の呵責と呼ぶほどのものではない。のみならず、前節で見たように六条御息所の歌に対する光源氏の歌や、生霊の狂暴化を招く対面の折りの言葉などから考えて、彼が彼女の葛藤を理解し罪の意識を抱いていたとは思えない。葛藤に触れる前に体よくかわしていたというのが本当のところだろう。だから六条御息所の生霊などという噂も、下種の勘繰りとはかりに否定していたのである。彼は御息所が生霊となって墓上に取り憑くなど予想もしていなかったのである。それだけに、生霊の正体を御息所のそれと知った時大変な衝撃を受けたのだといえよう。いわば、光源氏にとって六条御息所の生霊は、「心の鬼」による体験ではなく、衝撃の体験だったのである。

このように葵を死に追い込んだ六条御息所の「生霊」が事実として書

『源氏物語』の影しい(遊離魂)の様々な様相構想には、その歴史的可能性と必然性を育んだ複雑で大きな文化基盤があることは意識しなければならぬ。したがって史実の面からは、作者が一体どんな靈魂観を持っていたかについて分析せねばならないし、一方、文学史的環境からは、作者として文学創作構想に(遊離魂)を選ぶ可能性と必然性を考える必要がある。その前に、文学作品を一つの自律的世界として、主に六条御息所の人物像と藤壺の人物像との比較を通じて「物の怪」の構想に秘められていた紫式部の創作意向をさらに探ってみたいと思う。

#### ＜二＞自己を獲得した魂の悲劇

『源氏物語』のなかに影しい「遊離靈魂」が登場していることは、前述した通り否定できない創作事実であるが、この事実は文学創作の構想技法としてまったくの虚構であることは言うまでもない。この事実としての虚構は作者一個人を超えた歴史要素が欠かせない、又とても個人的な意識の表れである。「遊離靈魂」の本質について前述したが、その共通の性質をさらに詳しく見ると、関根賢司氏が指摘されたように、(A)「この世に遺した子への執着か、(B)「この世に遺した異性(男)への執着か」に因るもので何れも、鎮められない魂たちの系譜である(4)。この設定には、作者の深層心象が自然に表出されていると見て取ることができる。が、その中で、同じ現世に執着を抱いている故、成仏できない魂なのに、なぜ六条御息所がとくに凄じい「物の怪」として作らなければならないのか。ということについては特に考える必要があるだろう。

六条御息所が、光源氏の人生にずっと付き纏って異常な乱暴ぶりである周囲の女君たちを苦しめ、取り憑き、殺す「遊離魂」の持ち主として書かれたことで、注目を集め、多くの論議を招いた。特に殆どの遊離靈魂が人々の夢の中に出現しているのに対し、「生き霊」にまでなったと

かれているというわけである。物語の事実としては、この他に、夕顔も間違いない、何かの「物の怪」(六条御息所の「物の怪」と同じもの)によって殺されたのだし、柏木の魂が確かに夢を通じて、夕霧に頼んで遺愛の笛をわが子に伝え、八の宮は娘と友人との二人にそれぞれ夢で死後の思いを訴えたのである。これらを、(疑心暗鬼)などの心理的な現象というレベルに持ってはいけぬ。柏木の病床に現れた「女の霊」や、宇治川のほとりに倒れた浮舟に憑いた「昔の法師」の場合にも具体的な(心)の関わりがあった人物ではなく、それぞれ正体の分からない(異性)である。このように、「遊離靈魂」という設定には、より深い命題意図が隠されていて、そして作品全体を一貫している。それは一次元の「宿世」というより重層的な(因縁)のもつれあいの意味しているかと思う。この中に無論作者の宗教的世界観が見られる。この觀念に時代性が存在することは否めないであろう。

私たち現代人が、この肉眼で頭脳で確認できないこと、説明できないことに対して、どんな態度を持っているかは、あくまでも現代文化、現代文明の中の認識である。現代では「物の怪」とかで社会的問題になることはまずないが、千年前は疑いなく全社会を震えさせたことだったのである。したがって古典文学作品を考察する時、まず忘れてはならないことは、作品を作品の作成時代に据えて、その時代の文化文明環境に基づいて、議論することではないかと思う。そして、このようにしてこそ初めてその作品の文化的価値を見いだすことができるし、作品を公正に評価することができる。したがってより深い意味での享受ができるのである。〈自己暗示〉とかいう現代医学による合理的な考え方を、紫式部の認識にして論ずることは、今まで見てきた様に、結局、研究者たちの「物の怪」観を論じられているように見られても仕方がない。『源氏物

いう設定によって、文学イメージから見ると、この人物はとにかく嫉妬の権化のような特異な性格を持つ、「悪霊」として評価されているようである(1)が、しかし、紫式部がこれを創作する意図は果たしてどんなものであろうか。この問題を考えると、その正反対に在る女性の理想像である藤壺を想起させる。では、この二人の人物は果たして善悪の両極の代表であるかどうかを考察してみよう。二人の背景の設定を見ると

(A) 六条御息所は、前春宮の妃。(B) 藤壺は今上天皇の女御。

身分からいうと、どちらもこの上なく高貴な御かたであるが、光源氏にとって(A)は、独身でその恋愛関係で世間には道徳的な非難を受けても、社会立場には、実質的損害はそれほどない。これに対して(B)は、帝の女御で光源氏との恋愛関係が絶対許されないことで、それは身の破滅をもたらす危険がある。

が、(A)と(B)そして(C)の葵上三人だけは、光源氏と関係を持った他の女君と違って、社会的に彼の保護下にいない。したがって自分の意志で自己主張をする可能性があったわけである。

続いて、(A)と(B)二人の個人条件を念頭に、光源氏と不倫の関係に在るそれぞれの生き方を見てみよう。以下は鈴木日出男氏の文章を参考に整理したものである(5)。

(A)は、源氏の執拗な求愛でその愛人となるが、高貴端正で深く思いつめる性格から源氏の足が途絶えがちになる。それで嘆く。

(B)は、その世にない愛しさで源氏が狂おしいほどその愛情に溺れ幾度も密会を強要され、不義の皇子まで生んだ、それで悩む。

(A)は、葵祭りや(C)葵上の一行に侮辱されて心が傷つき、Cの懷妊を知って、屈辱感が強まる。その魂が意志とは無関係に「物の怪」となって産後のCを取り殺した。その後、源氏の愛情を断念して娘の斎

宮につきそって下向。

(B)は、源氏との不義の關係が世間に知られない、傷つくどころか二人の間の子のお陰で、中宮となる。

(A)は、臨終の際、娘の親代わりという形で光源氏に娘希宮の後見を託す。

(B)は、源氏との關係による身の破滅の危機と、春宮の地位の危機を感じて、出家を決意。その前に源氏を春宮の後見に頼む。

(A)は、死後、源氏が紫の上を相手に女たちを追憶する時、言及されることを怒って「物の怪」となって、自分が悪名を遺して成仏できない恨みを述べる。

(B)は、(A)と同じだが、隠れ事が漏らされて自分の名譽が傷つくという心配を訴える。

物語の構造上で、(B)の「不義の皇子の出生」と、(A)の「物の怪の祟り」の構想は物語の展開方向に大きく影響していることは、すでに先達に見事に論破されたところである。でも、ここで強調しておかなければならないのは、作品の構造の展開と主題テーマの展開とが相即不離の哲學的關係にあるということである。六条御息所の「物の怪」の必然性について、物語の事件以外の政治的挫折や家系の零落など、(因縁)のもつれを想像することができるが、それはともかくとして、上記の事項から藤壺と六条御息所との相似性と相違性は明らかなことである点を強調したい。その運命の雲泥の差をどう理解すべきかを考えなければならぬ。

1、六条御息所が年上のこと、社会的名譽を氣にしようがない。この氣難しい性格のせいで、そしてその固い高貴さで源氏の情熱を冷やした。に対して、藤壺は年上のことも、そして社会的には名譽よりずっと

対に藤壺の理想性を強調する為の設定である。なにせこの物語が女性の貞操観を説教しようとするものでないことは言うまでもない。したがって、だれが墮落で誰が烈女とかを云々するものはない。あるのは女性のタイプ——様々な生き方というものだけである。それは理想の男性を座標に、その愛にめぐりあった女君たちにそれぞれどんな態度を取り、その女性タイプによってどんな人生を迎えたかを物語ろうとしているように思われる。これは、①、「雨夜の品定め」という特別に設けられた理論的一節と、②、それから、作品全体に次々と登場してきた夥しい女性の物語と、③、その女性たちは性格の重複するもの一つもないことと、④、ないしこの女君たちが源氏に対してそれぞれ違う態度をとり、それに対応した生き方を辿ったなどの創作構成から想定できる。ここで六条御息所のタイプ設定の意義をあらためて考えなければならぬ。一つ揺るぎない結論は、藤壺が、最初から完璧な女性で光源氏に唯一似合う「輝く日の宮」としてタイプ想定されているからには、すべてが賛美されるわけで、光源氏という人物像と同質なのである。源氏が俗世界の最高権威である天皇の御前であらうと、人間の精神世界を支配する最も神聖な場所であらうと、欲しいままに愛情をものにしたが、許されたという想定も、みなその理想性によって成立し得る。一言でいうとその理想性や素晴らしさによってすべてが賛美されるものとなり、もちろん心を許したのは作中のすべての人間ばかりでなく、読者も納得させられたのである。この創作意向に言及した詳しい論説には、前掲した鷲山茂雄氏の同文献を見ることもできる。ところが、このような源氏に対して、その自己本位の愛情を最後まで糾弾して許さなかった、というタイプの、たった一人の女性が紫式部の筆下に生まれてきた。六条御息所である。この人物には作品のテーマが際立って強く反映されたと思われる。作者の、

深刻な危険も抱えているのに、源氏を冷静にさせることができなかった。

それは何故なのか。藤壺には氣難しい性格がなかったからだ、その理想性に帰されているようであるが、六条御息所よりもっと高貴で冷静な筈で、その恋の反社会性がずっと深刻なものと思われるけれど。空蟬や朝顔というような女性でも源氏を拒むことができたから、一国の国母という立場の藤壺にはできなかったことは、何を物語っているのか、それは藤壺も源氏を深く愛したからにほかならない。

2、この二方の高貴な女性が、同じように源氏を愛したが、一方は今上帝を裏切った「不義の子」を出産したのに、益々世間の敬愛が高く、いよいよ榮華の頂上に昇りつめていく。片方は魂が意志を裏切つて遊離し人を殺してしまうほど、深い傷と社会の悪評を受け、都を離れる。

3、二方とも、生みの子をかつての愛人光源氏に託し、そして確かに彼の絶大な力によって、みな人世の最高の榮華の地に立ったが、しかし、六条御息所の娘秋好中宮は、人生をその母の往生できない罪深い魂のために念仏したいといってそれを捨てて出家してしまう。

4、幽界にいった二つの魂は同じように源氏の眼前に現れて恨みを陳情する。一人は他人に過去のことを源氏が漏らして、自分の好名声が傷つくことを心配する。一人は死んだ人が、たとえ生きている時、罪を犯したとしても、寛大に許すべきなのに、幽界の人をあだ、こうだと批評するのがけしからんと恨みを言わなければならない。

右の比較で、藤壺は罪がずっと重いの世渡りが上手で偽善的にも全世界を騙したという結論を出したいとは決して思わない。文学作品は、結果的に、読者にとって作者の予想を背く読みとなったことが、文学領域にはよくあることである。上記の藤壺のすべては作者がけつしてこのような結論に導くために故意に書いたのではない。それどころか、正反

女の人生に対する悲觀的な認識の一面が、もっとも深刻に表現されている。どんなタイプの設定にもそれなりの理に——人間の魂の真実にみごとになつているところこそ、紫式部のすごさである。六条御息所のタイプ設定には、他のすべての女君と違った、女の人生のもう一つの真実が指摘されたのである。つまり、幽霊の形になってはじめて魂の自由を獲得でき、そしてこの魂が本人の意志と關係なく相手を襲うところに、女の悲劇性が幽明両界にわたって奈何ともできないものであり、自我救済できない運命であるという主題意向が見える。

何故六条がこのような「生霊」になれたかという、性格の激しいこともあろうけれど、独立できる社会地位をもって、源氏の保護下にいない、故に、紫上や明石のような自己抑圧でなく、幽明両界で「自己」を主張し、光源氏を断じて許さなかったのであろう。社会的に同じく保証されたたった二人の藤壺と葵上はまた違う。藤壺は帝の後で身の自由がないし、葵上は親の社会的な利益の絆に縛られているから、「生」の自由がない。六条御息所だけは自分の人生を決める可能性があった。つまり客觀的な条件では自分の心に忠実に生きることができるのである。だからこそ、正妻の葵の上が亡くなった後、その後添えにならうとか世間に推測されたぐらいであった。それに、作者は彼女にその高貴な身分に相応しい頭腦、才学、容貌を与えた。これらの要素によって高い自尊心と自己意識を持つ個性的な人物として、登場してきたのである。だからこそ、その「生霊」と「死霊」は、源氏に、自分の愛情と相当する愛を自分に相応しい尊重を要求してやまなかったものである。源氏を愛する感情の激しさと、年齢の差や社会名譽などによる不安につねに苛まされていた理性との葛藤は、言ってみれば、その時代の一般的な生き方と違う可能性を有した女性が自己を意識した結果である。この張りつめた感

情と理性の葛藤の最中に、葵祭りの「車争い」が起こったことは周知の筋書きである。精神の極限に迫りつめられた時に、主観意識と関係なくひとりてに浮き出て、相手の墓の上を取り殺した魂「生き霊」とは決して屢々指摘されるような光源氏の愛への「執着」ではない。それは先ず疑いなくこの自己意識による「自己主張」である。六条御息所の「物の怪」が現れる度に、恥をかかされたとか侮辱されたとか、恨みを言つて、その復讐の矛先はいつも源氏に向けていた。ただ、源氏には、いつも強い神仏の加護があつてどうすることもできなかっただけのことである。これも彼が男の身だからだろうか、或はその理想性によるかと思われるが、ともかく、他の女君ならば、何らかの思惑から、何らかの形で自己慰めや自己抑制をして、我慢できた光源氏の多様な愛人関係は、彼女には我慢できなかったのである。葵祭事件は他の女君の場合だと、泣き寝入りして薄幸の運命に愚痴をこぼすくらいで済んだことであろうのに。

とはいうものの、現実の中の彼女は決して鬼のような女とは、紫式部は書かなかつた。無意識に「生き霊」になったことは、大変な結果を招いた現実である。この「無意識」の間に起こった事実によつてこそ、彼女の理性的人格の高貴さを証明したと同時に、その精神的崩壊の真実の深刻性を裏づけたのである。もし一般的に批評された所謂「執着」か「執念」であれば、意識的に他の女君たちを呪詛したと書かれた筈であらう。この無意識の真実の設定に、紫式部のより屈折した人間認識が見いだせる。「無意識」という設定は「遊離靈魂」になったのを単純に善か悪に分けるものではなく、人間自身には意識的に奈何ともできない魂が身を破滅させても真実のままに動くということを明らかに物語った。男性の自己本位の愛情に対して、自己を殺すか、愛情を放棄するか、苦悩

ない。死んだ後では、「死霊」になる、という悲劇構想は、文学世界でも、現実世界でも理にかなつた自然至極なもので、言うまでもなく作者の見事な成功である。特に六条御息所が死に際に、娘の親代わりとして権勢の頂点にいる源氏に依頼した構想によつて、魂の底から源氏への絶望的不信が明言されたようなものである。そして最後に、幽界に迷いながら、源氏の前に現れ、恨みを訴えたのは、六条御息所だけでなく理想女性の藤原も一様に幽霊の姿になって怨恨を述べたところは、特別な意義があるのではないか。結局のところ、幸せにも源氏に深く愛された女君たちは、誰一人その愛を心から満足する人がいなくて、人生の最後は出家をすることで、自分の魂の救済を来世に期待する結末になる。源氏の愛に頼りながらも女君たちの心に奈何ともなし難い一面があつた。六条とは、最終的には「宿世」に帰して、魂の救いの希望を念仏修行することに寄託するほかないという点で、なんらの違いもないのである。六条は一見して特異なタイプの一人のようにみえるが、実際は、本質からいうと、光源氏という一人の人物に「男」という人間存在の全体像が凝縮されたのに対して、「女」という人間存在は、六条が他のタイプの女君と合わせて、複数のタイプにより、様々な角度から表現された、というような読み方ができる。一人の女君は、「女」という存在の「心」の鏡の一つにすぎない。どの女君も最後には、この「心」という一終極に回帰せざるを得ない。こうして『源氏物語』からは、紫式部の、女という人間存在に対する宗教的認識の最終到達点が見られるのではなからうかと思う。

### 〈三〉紫式部周辺の「遊離靈魂」たち

上述を通じて、「物の怪」という遊離靈魂の構想は紫式部が、人間の心の象徴や自己暗示としてでなく、作品の主題に直接結ばれて、物語の

から逃げ出すかなど、女性として△己▽の魂へ向かつて様々な形で対処を行った中で、この意識の檻さえ突破してまで、現実社会のすべての束縛から脱出して、男に魂の疼きを主張せずにはいられない悲劇的タイプの人物像を通じて、女の心のもう一つの真実を描き出して、作品のテーマを一層深めた。

このような構成となつていた六条の「生き霊」と後部の「死霊」及び藤原の「死霊」——ともに高貴な女性に起こった「遊離靈魂」構想には、紫式部の、その時代の女性の魂の真実の一面への鋭い観察だけでなく、この実態に対する悲観的解釈も見られるのではないか。

女として魂には六条のような自己意識、自己主張という真実の一面があるけれど、その時代環境の中に身を置く限り、僅かな一瞬であっても自由を獲得しようとする魂は、悲劇になるのが決まった運命である。これに対する式部の認識は決して曖昧なものではない。魂が脱出するのは、真実の自己を主張するため、実現するための方法である。これは即ち、男に浮気されても嫉妬しない、少なくとも表面には出さない、男に自己尊厳を主張しないという態度が、社会的理想であり、女の義務、美德とみなされた社会全体に対しての反抗であり、社会的に認められるためにその道徳観念によつて魂を作り直すか偽りに隠すかという常識の生き方に背くことである。紫式部といつても、このような女性の一面の事実を認識できたものの、彼女自身もその時代の観念によつて育てられ、真つ向から否定しようとは思えないだろうし、そのような「魂」を利口とも思わないであろう。それでも、この生き霊の「無意識性」を設定したことから、作者の人間の魂の真実への深い感知能力と深い同情が見出せると言つても間違わないであろう。この「生き霊」にまでなる人物の運命は、その反社会的な行為によつて、生きる時、愛情をあきらめざるを得

発展を方向づける事実として書かれたことを見てきたが、このような文学創作の特徴を可能たらしめた歴史的周辺をみる必要があるかと思う。なぜなら文学作品は歴史的文化的過去と現在とが結合して作り出したから生まれてくるものであるから。

まず一つは当時の歴史的事実として、幽明両界の存在は一般的に認められた現実であつた。それまでの政争の敗北者などの怨霊による祟りの故事や、不可思議な霊による天災ばかりでなく、当時、紫式部が仕えた藤原道長家においてさえ、現実的に怨霊の影に怯ていた。日々になえず行われた盛大な念仏祈禱の行事などを紫式部が自ら書き記しただけでなく、藤原氏が前掲のご本に挙げられた「権記」や「小右記」などにも、亡霊の祟りは事実としてそのまま記録したのである。つまり憑霊現象は現実生活に起きている、人々を恐怖に陥れる事件であつた。そして、その退治の方法として、ひたすら法華経をはじめ仏教経典を誦誦したり、念仏したり、観音像祈願や、仏像、堂塔の建立など様々であつた。また、称名念仏によつて「この世に災いをもたらす怨霊はじめ死者の霊を浄土に鎮座する」(7)のが社会通念であつた。このような社会環境に身を置いた紫式部には、たとえ現代人のような常識があつたとしても、時代の読者層の社会観念や知的水準を一方的に否定するような創作は考えられない。逆にこのような時代環境だからこそ、作品の「遊離靈魂」構想が生かされて文学創作の成功が保証されたといえよう。或いは時代の気風が彼女にこれを選ばせたのだと言わなければならない。

紫式部が「遊離靈魂」構想を選んだもう一つの可能はその時代の文化的背景にあるかと考えられるようである。その時代の文化の担い手が主として国家官僚で且つ文化人である男性たちであることは言うまでもなく、時代の文化を代表したインテリ達、鬼神奇異の世界に対して、ど



んな態度を取ったか。このことについて、渡辺氏がその博士論文(8)に実例を挙げながら指摘されているところを見るとわかるであろう。つまり、公の事業としての国史の編纂などの場合、「幻怪奇異に満ちた巷間の異聞、古伝承は、〈虚証〉〈妄語〉として公認された歴史の表面から追放され」たり、それを語ることは、しばしば遺勅の罪であった」りして、合理的解明精神があったが、しかし「平安貴族文人社会の文知主義の合理は、〈虚証〉〈妄語〉に溢れた土俗的野巷に危うく精華を誇って同居しているに過ぎないし、彼らの高踏的開明性には、容易に神怪なる幽暗と親和しうる重層的な意識構造があった。」実際、合理主義的と言われる儒教でさえ、幽界や非日常的事象に対しては、人知の及ばぬこととして「保留、判断停止」の態度を取ったのである。或いは明らかにその実在性を予告する嵯峨や白樂天などの鴻儒もある。平安朝の文人の中にも、このような文化人(文章博士春澄善縄や、都良香など)がいたことや、このような思想や憧憬をもって、超自然的出来事を自ら目撃した事実として日記や伝記などの作品に書き記したことにについて、渡辺氏は、紀長谷雄の作品と初期物語の成立などを通じて、幾つかの側面から分析されているから、ご参考を願いたい。このような時代の文化風土と文学創作実践が、女の身ではあるが、実際は同じ文化で育てられた知識人である紫式部にとって、その物語の創作構想の文化的基盤となったことは推定できよう。

それに男性文人達が中国の神仙隱逸思想、靈魂観、乃至それについての知識や文学表現を多く吸収したように、漢文教養の高い紫式部もそれを物語の中に多く取り込んだことが、作品自体によってよく語られた。

紀長谷雄が大納言源能有の五十賀の屏風のための料に『列仙伝』『幽明録』『述異記』『異苑』などの本文を抄出する依頼に答えた(8)と

だ。そこで結婚しないと誓った娘を阿が娶った。

右の遊離靈魂の話は生き霊のすべての性質をもっている。つまり、石家の父がいった「精情所感、靈神為之冥著」——強烈な感情の故に、魂が目に見えない冥界の中でおのずと身体を離れて形を表してくるということである。これは源氏物語の六条御息所の生き霊を想起させる。このように魂と肉体とが離れたことは、『搜神後記』などにも、記されているし、後の唐時代になると、肉体と靈魂とが離れるのを題材にした有名な愛情小説『離魂記』をみる事ができる。それだけでなく、当時の名人が自らの体験として、夢と事実とが見事に一致したことを記録したものもある。例えば白樂天の弟にあたる白行簡が書いた『三夢記』がそれである。この夢とはむしろ人間の肉体をひとりてに出てしまった靈魂と見ても良いようなものである。

死霊の祟りの記録ときたら、紀元前の国家正典の史書『左伝』(「昭公七年」)に政治闘争の敗北者の怨霊が政敵を次々と殺したことが書き記されている。そして後世の書籍にも、靈魂に関することが綿々と書き綴られて、まさに枚挙に遑ない。とくに六朝時代の書物となると、普通の庶民が主人公で、日常生活の中に起こった出来事として簡単素朴に書かれたものが多い。その特徴といえば、また源氏物語と多々相似しているが、次にまとめてみる。

①死霊になって現世に祟りをする鬼は殆ど何か不当に扱われたことによる強烈の感情や、精神的ショックの結果である。女の場合だと、自分が死んだ後、夫が妹や、使用人を娶ったとかいう理由でのへうわなりうち(『幽明録』、『述異記』、『冤魂志』など)。或は自分を殺害した人、自分の子供を虐待する継母への復讐(『志怪』)。

②幽霊たちは自分が「亡人氣弱、須有所憑」(『雜鬼神志怪』)とい

いうところから考えると、女性である紫式部には、国を治める官僚として学習せざるを得ない正統の歴史や經典などよりも、むしろ右のような物語性格の強い書籍の方がより容易に親しまれたのであろう。これらの書籍の性質、内容と照らし合わせてみると、源氏物語の「遊離靈魂」構想にこの文化的可能性と必然性をあらためて見出たことができる。

なるほど、右に挙げられた中国書籍のほかには、異世界の実在や靈魂不滅への信仰を最もよく表した六朝時代のものが、平安朝にまだまだ沢山存在していた。例えば、『搜神記』・『搜神後記』・『列異伝』・『拾遺記』・『博物記』・『神仙伝』・『妬記』等々数え切れない。これらの作品を著した中国の文人たちの創作目的がほかではなく、「神明神道之不誣」といって、鬼神に関する出来事を事実として実録したものである。これらの本の内容を見てみると、出身や名前もある実在した人間であり、そしてそれは有名である場合も少なくない。それに書きぶりは文学的創作ではなく、単純素朴な記録性がその実在性を裏づける。この中の二三を挙げてみると、神仙譚的性格のものを取り除いても、『源氏物語』にとって興味深いものばかりなのである。

例えば、藤本氏が「生き霊」の構想は日本の諸書に例を見ないと述べられているが、しかし『幽明録』には「厠阿」という話で「生き霊」の実態がよく書かれたものがある。隣の美男子の厠阿を自分の部屋から覗いた時から、石家の娘は魂が何回か朦朧と夢を見ている間に肉体を離れて、彼の部屋に入り込んだ、ある時気づいたその妻たる女に捕まえられて、石家の父の前に連れて来られてきたが、その父はあきれて、母親と仕事をしている娘を部屋から呼び出したとたん、縛られたほうの娘が忽然と消え去ってしまった。その母に聞かされると、娘が朦朧と夢を見る時のことを白状した。何年か後、阿の妻が急病にかかり、医薬も効かずに死ん

って、対象の「神氣湛然、不可得乗」(『雜鬼神志怪』)という。そしてその攻撃は必ず相手が病弱、出産、睡眠など心身ともに弱くて無防備の時に仕掛けてくる。

③その祟りは殆ど被害の結果だけを確実に現実にもたらしてくるが、声ばかりがきこえたり、特定の人の目にだけ見られたりするといった具合である。

以上見てきたように、『源氏物語』の〈遊離靈魂〉構想には、歴史的必然性と文化的背景があったと推論できると思われる。つまり人間の靈魂の存在する場合は幽明両界があるという認識と、実生活の中に起こった特異的事件に対する時代的な解釈・認識において作者と読者の間に歴史的な一致があるということである。と同時に、文学創作の先決条件として、日本の文化人による創作累積と中国書物からの知識材料の累積と、及び当時の散文的創作の題材傾向があつてこそ、紫式部には〈遊離靈魂〉を文学的に構想することが可能となったと考えられる。

実際には、このような先行条件は〈遊離靈魂〉の構想には限らず、ほかの構想からもその影響が見られるようである。例えば、『源氏物語』の世界では神仙世界の要素が完全に排除されたといわれているが、果たしてそうであらうか。光源氏が腐心して一生を賭けて、雅やかな二条東院と、春夏秋冬四季折々の美しさを備えた六条院を築き上げて、女君たちをそれぞれ身分相応に集め住まわせる構想は、いってみれば、特定の男が美しい山水の中にある麗しい玉楼に踏み込んで、美人たちに囲まれて暮らすという神仙世界の基本要素が何一つ足りないものがない。違ふのは、このような世界を、天上でなく、人里離れた奥山でもない、地上人世の真ん中に作ったということだけである。それに、女君たちが雲や雨のように忽然と現れては消える、一様な女仙でなく、魂の欲望や悩

みを抱えた様々な性格タイプの女であり、理想郷の中の哀れむべき麗人たちである。また、光源氏という人物像からも、六朝あたり盛んに書かれた「人物伝記」（『世説新語』など）の影響が見られなくもない。たとえば男性の女性的美貌の強調や、多才多芸で且つ風流優雅な生き方などである。言うまでもなく、平俗な人間でないから、まさに神仙世界に相応しいために、美貌と社会地位と聡明さと才能のすべてを持った人間でなければならぬ。その理想像を完全なものにするために、貧困でひどい顔の末摘花や自分を冷たくことわった空蟬なども保護下に据えなければならぬのである。この問題については次の機会に検討してみたいでは、本論の主題に戻って、以上の論旨をあらためてまとめていうと一つの文学作品は、特に『源氏物語』のような千年も前に書かれた書籍などを、それを生み出した時代の社会環境、知的環境の中に据えてみると、現代人の私たちの社会意識、価値観、知的水準を古人に押しつけて論ずるようになるおそれがあるかと思われる。『源氏物語』という作品の事実として、作中の人物達の「心」の深層模様をあぶりだしたのが肉体を離れた「離魂」である。その跳梁ぶりが実在の事件として書かれたことによって、人物の悲劇性を完成させたと見えよう。この「魂」たちは、単に、物語の各節目に物語のクライマックスの輝きをだすためあるいは作品全体にめりはりを与えるための創作技法ではなく、また単に、構造的に物語の展開方向を導くだけの一元性のもでもない。この「遊離魂」の設定こそ、関係する人物の「心」を互いに全方向から構成し、それによって物語のテーマの充実と重層構成が見事に完成できたのであろう。

この意味からいうと、この物語の魅力は半分この「遊離魂」たちによるもので、この靈魂達の具体的な跳躍についてのリアルな描写によっ

て読者が引き込まれるのである。これはまた現代人の読者の場合も否定できない文学享受の事実である。作品の世界においては、これらの「遊離魂」たちが作中の人物たちの幻想にあるのではなく、彼らの体の傍に、枕の上に、実際の夢の中に間違ひなく来た現実そのものである。この構想にはその時代の文化の息吹が感じられるし、無論、この「遊離魂」構想には宗教的な理念が存在しているとも思われる。が、近時藤本勝義氏の『源氏物語の「物の怪」』という著を拝読して、大いに啓発を受けている中、この「遊離魂構想」には、上述した通り、『源氏物語』の「遊離魂」構想の意義、及び当時の歴史環境と、文学創作の環境におけるその可能性と必然性、ないし文学創作自体の自律性における可能性などについて、考えてみたものである。

#### 参考文献

- (1) 『源氏物語の「物の怪」』藤本勝義著 青山学院女子短期大学出版 1997年 学芸懇話会シリーズ37
- (2) 『源氏物語の境界3』新典社 平成8年
  - a 「六条御息所の生霊について」熊谷義隆
- (3) 『古語例解辞典』北原保雄 小学館
- (4) 『源氏物語事典』（別冊国文学36）秋山虔編 学燈社  
「源氏物語表現・発想事典」（鎮魂）関根賢司
- (5) 『源氏物語必携』（別冊国文学NO・1）秋山虔編 学燈社
- (6) 『日本文化史』笠原一男 日本放送出版協会
- (7) 『人間の歴史』笠原一男 日本放送出版協会
- (8) 『平安朝文学と漢文世界』渡辺秀夫著勉誠社出版